

水のテーブル

安富節子

雪ふればふるさとの雪と続いている思い出つれて幾たりのくる

こころ憂き春はしだいにほこほこと雛をつつめる結界の風

「雪花菜」のやさしい文字をもてるものおからをはめば春まつ盛り

歌よみを教えし妣ははの細き手よ五月イツキという名の五月はやさし

百年の闇をみつめてゆずり葉の風はのこしぬ母の寂寥

保護犬の三太がとつぜんやって来たばあばの膝で月を見ている

ごみ出しの人らにじやれる三太くんあそぼあそぼと夏の子になる

居場所なくさまよいてゆくかげろうの胸の記憶がうすれゆく秋

お狐は紅葉の衣まといつつ赤の鳥居をくぐる日待つ

雨やみし青田につどう白さぎのみつめあうなり 水のテーブル